

川崎市教育委員会賞受賞作品

「未来へ語りつぐこと」

夢見ヶ崎小学校 6年 江森 蓮

今日は、とても暑い一日でした。今年ももうすぐ八月十五日がやってきます。知ってのとおり八月十五日は、戦争が終わった終戦記念日です。戦争が終わって今年で七十三年がたちます。その日もきっと今日と同じように暑い一日であったことでしょう。

ぼくは、この間、学校の授業で動物園や広場などがある加瀬山に行きました。そのときに慰霊塔という塔があることを知りました。その慰霊塔についてインターネットで調べたり、祖父母から聞いた話によると、慰霊塔は、七十三年前に戦いで亡くなってしまった兵隊さんたちや空しゅうで亡くなってしまった人々の心をなぐさめるため、川崎市が建てた塔だということが分かりました。

当時の川崎市は、重化学工業を中心とした京浜工業地帯にあり、軍じゅ産業などの武器を造っていたため、本土空しゅうの標的にされました。そのときに、川崎市にも数多くの B29 がやってきて、ぼく弾をたくさん落とし、川崎市は一夜にして焼け野原になってしまいました。そのとき市役所の前に大きな穴が空いていて、その中には、空しゅうで亡くなった人々の遺体が物のように積まれていたということを、ぼくは知りました。家族に守られて毎日幸せに過ごしているぼくには、戦争は、とてもこわくて、おそろしいものだと感じました。そして、二度と戦争は起こしてはいけないということを、強く感じました。焼け野原になってしまった川崎が、今どうしてこんなに発展したのか想像してみました。戦争で亡くなられた先人たちの、これから先平和な世界になってもらいたいという思いに答えるために、人々が毎日の生活の中で、知恵をしぼり、工夫し、新しいものを築きあげ、がんばってここまで発展させたのではないのかと思います。今度は、ぼくたちが先人たちの思いに答えていく番であると思います。

ぼくたちは、先人たちによってまかれた未来への種だということを感じます。彼らの声なき言葉に耳をかたむけて、その思いを語りついでいくことがぼくの役割であるということ強く感じます。

より豊かで互いが信じあい、支えられる社会を育て、昨日よりもちがう今日一日を築いていくことができれば、明るい未来が両手を広げて待っているものだと思います。過去の教訓から学び、未来はこの手で切り開いていくものであると強く感じます。加瀬山にある慰霊塔は、「ぼくたちが毎日の生活の中で忘れていたこと、忘れかけていたこと」をだまって、ぼくたちに語りかけているように感じます。

そしてぼくは今、平和に毎日を過ごせるなんてとても幸せだと思います。それを気づかせてくれた先人たちに、とても感謝しています。

平和とは何でしょう。国どうしのケンカを戦争だとすれば、話し合いがこじれると戦争になります。ということは、話し合いを行い、相手を理解し、互いに信じ合える関係ができればケンカがなくなり、戦争がなくなって平和な世界になると思います。その話し合いをするのは国と国、人と人です。国を代表して話し合いをし、交渉して戦争を起こさないようにするのが外交官の仕事だと思います。将来ぼくは外交官になって、戦争が起らず、人々が豊かで幸せを感じられる毎日を過ごせるよう、国と国の架け橋になりたいです。

ぼくは、過去を知ることが未来を知ること、過去を知り未来を尊ぶこと、そして語りつぐことだと思います。八月十五日、その心を胸にきざみ、そっと手を合わせたいです。